

老舍『火車集』試論

—— 戦争表現を巡って ——

渡辺武秀*

On The “War” of Lao she (老舍)’s “Huo Che Ji (火車集)”

Takehide WATANABE*

概论

这篇文章是我研究一些老舍短篇小说集《火车集》里描写日中战争的部分，而理解老舍描写战争的特长的成果。

老舍《火车集》是1939年出版的短篇小说集。老舍已经发表了1934年的《赶集》、1935年的《樱海集》、1936年的《蛤藻集》等短篇小说集。所以《火车集》就是老舍的第四部短篇小说集，共收录了老舍在1937年到1938年之间发表的9个作品。

大家所知日中全面战争是由于1937年7月7号的爆发卢沟桥事件而爆发的。这个战争不但影响到整个中国社会与人民，也影响到老舍个人。战争迫使他于1937年10月离开家族，独自去武汉生活。我以为，由于这些关于社会和个人情况的原因，他的「7・7」以后的作品里出现了一些变化。这些变化之一就是，老舍开始更多地描写日中战争中的各种各样局面。所以，这次，我讨论一些关于这个变化的《火车集》里的描写日中战争的部分。

Key words: War, China, Laoshe

はじめに

老舍の『火車集』は上海雑誌公司から1939年8月発行された短編集で、老舍の短編集としては、『赶集』(1934.9)『桜海集』(1935.9)『蛤藻集』(1936.11)に続く第四作目となる。この『火車集』に収められた作品の初出雑誌、発表時期は以下の通りである。

『“火”車』(「文学雑誌」創刊号・1937.2.1)
『兔』(「文芸月刊」第11巻第1期・1937.7.1)
『殺狗』(「文学雑誌」第1巻第3期・1937.7.1)
『東西』(「文学」第8巻第2号・1937.2.1)
『我這一輩子』(「文学」第9巻第1期・1937.7.1)
『浴奴』(「自由中国」創刊号・1938.4.1)

『一塊猪肝』(「民意」第14期～15期・1938.3.16～25)

『人同此心』(「抗戦文芸」創刊号・1938.5.4)
『一封家信』(「文摘」戦時旬刊第37号・1938.11.28)

この一覧からもわかるように、この短篇集の各作品はすべて1937年から1938年にかけて発表されたものである。

これらの作品の発表時期は、1937年7月7日蘆溝橋事変をきっかけに、日本と中国が全面戦争へと突入して行く時期と重なっている。このような時期、老舍は、悩んだ末に、日本軍占領下の場所で生活することを避け、妻や子供と別れ単身で山東省の済南を脱出し、まだ占領されてない武漢に行くことになる。

1937年10月以後の老舍の行動の詳細は以下の通りである。

平成16年12月17日受理

* 総合教育センター・助教授

(一九三七年…筆者)十月、濟南爆撃、大学は閉学状態。多くの文人が脱出を続ける中で、陸游の『劍南詩稿』を胸に、老舎は悩んだ。日本に帰順するか、脱出するか迫られた。北京の母のこと、妻と四歳、二歳、生まれたばかりの幼い三人の子供のことを考え、悩み抜いた末、母親と子供のことを夫人に托し、濟南を単身脱出する決意をする。/十一月十五日、夕方、国民党軍による津浦路の黄河鉄橋爆破、その日のうちに、夫人の用意したトランク一つと五十元のみを持ち、「汽車がなければ、すぐ帰ってくる」という言葉を後に家を出る。途中知り合いに会い、駅まで同道。徐州行き切符を買う。汽車は満員で乗れず決心がにぶるが、夜十一時、友人がボーイに二元握らせたので乗ることができる。夜中一時、列車発車。/十一月十六日、泰安を経て、午後七時徐州到着。鄭州行き切符を買う。鄭州にて家族と漢口の友人に電報を打つ。/十一月十八日、漢口到着、中学同級生白氏の家(旧ドイツ租界地華清街?)に落ち着く。新婚の白夫人に土産として服を買う。友人の朱、蔡両氏と会い、オーバーをもらう。^(註1)

このような時代背景、このような個人の事情を反映し、この短篇集『火車集』の作品は従前の作品とは描く内容が変わって来ているように見える。その最も顕著な点は、特に「7・7」以後、これまで正面から取り扱うことのなかった日中戦争の様々な局面を積極的に描きはじめていくところであろう^(註2)。そして、この種の戦争を積極的に取り扱う傾向は、日中戦争時期はいうまでもなく、戦争終結以後も長く引きずって行くことになるのである。

これを、戦争を扱っている主要な作品の流れで簡単に示すと次のようになるのではないかな。

本格的に戦争を扱った作品は、この短篇集『火車集』で、書き始められ、そして1944年の『火葬』という戦争を描いた長篇作品を経て、ついに1945年から1949年まで費やし書き上げた『四世同堂』^(註3)で完成する、と考えることがで

きるように思える。少なくとも『四世同堂』が戦争を扱った作品の集大成であるという事実は動かないだろう。

それ故、本論文では、『火車集』のそれぞれの作品から「戦争」の部分を取り上げ、それが、『火葬』や『四世同堂』へと向かって行く創作の展開で、特にこの短編集の作品に描かれ、しかも後の『火葬』や『四世同堂』にも引き続き描かれているようなものがあるのか、あるとすれば、どのようなもので、その作品にどのような萌芽がみられるのか、それは一体どのように描かれているのか、ということを中心に検討してみることになる。

この検討によって、老舎が「戦争」表現を通じて描き出そうとしたものが明確になり、また、さらに、これによって老舎文学全体の変遷がいくらか明らかになるのではないかな。

なお、この『火車集』の作品のうち、「戦争」が作品のテーマと重くかかわっていないと思われる作品、或いは「戦争」を描いていないと考えられる作品、例えば『“火”車』『兔』『我這一輩子』は、今回は扱わず、別の機会に論ずることにした。

一. 作品分析の方向

ここで本論文における作品分析の方向を示しておく。

筆者はすでに『火葬』『四世同堂』それぞれの作品については以前考えたことがある^(註4)。この時の成果を参考にし、つまり『火葬』や『四世同堂』から『火車集』の各作品を眺めてみると、『火葬』や『四世同堂』で作品の中に活かされているものが、すでに『火車集』の各作品の中にあることに気がつく。このようであるから、まず、そのような共通部分の幾つかをここにまとめあげ、その後で、その幾つかの共通部分を中心に、『火車集』の作品を分析して行くことにしたい。

(1) まず、日本軍に占領された都市を舞台に

したものがあるといふ点である。

『火葬』と『四世同堂』には日本軍に占領された都市という共通する場面設定がある^(註5)。このような場面設定は、じつはこの『火車集』の短篇作品ですで行われている。老舎がこのような場面設定で作品を書きたいという意図が、意外に早い時期からあったということがわかる。この例の作品として、『人同此心』を挙げることができる。

(2) 作品に漢奸を登場させ、その人物を戯画的に描き出しているという点である。

『火葬』『四世同堂』の両方とも「漢奸」或いは「売国奴」というような言葉で表される人物たちが、老舎の作品では特に重要な役割を担っていると考えられる^(註6)。この漢奸の登場は『火車集』のひとつ前の『蛤海集』という短編集の作品、『且説屋里』にすでに見ることができる。そして、この『火車集』の『東西』で漢奸の問題が再度取り上げられることになるのである。だから、漢奸を扱った作品としては、時期の早さという点では『且説屋里』が先である。『火車集』の各作品という限定はずれるが、この作品についてもここで考えることにする。因みにこの作品は「開明書店創業十周年記念集『十年』」という雑誌に、『東西』発表一年前の、1936年7月に発表されたものである。

(3) 作品の中に占領された都市の中で日本軍に抵抗する人物が描き出されている点である。

『火葬』『四世同堂』にももちろんある^(註7)のだが、この『火車集』にも、中国人の知識人で、日本軍に抵抗する、いわば理想的人物がすでに描き出されている。特に、日本軍統治という、閉じこめられた空間の中で、知識人たちは、どのように行動すればいいのか、しばしば問われることになる。これに対するいくつかの答えが、この短篇集にもすでに見て取ることができるのである。この理想的な人物が持っている性格、態度、考え方という点は、どの作品でも一貫しているようにさえ思われる。これらのものは『殺

狗』、『一塊猪肝』、『人同此心』で理解できるように思う。

まず、この三つの視点を今回の分析の中心に据えておきたい。

以下、それぞれについて述べて行くことにする。

二. 都市が占領され、人々が閉じこめられるという場面設定

『火車集』で、都市が日本軍に占領され、その都市の中に人々が閉じこめられるという場面設定が全面に押し出されているのは『人同此心』という作品である。このことはこの作品の冒頭からすぐに理解できるのではないか。

彼ら三人はみな漢奸になろうとは思わない。年齢、知識、理想、これらが簡単に如何なる人の前にでも膝を屈することを許さない。/しかし彼らは占領された都市の中に閉じこめられた。英雄と漢奸の間に、ただ彼らに残されているのはわずかな、ひとつの隙間である。——忠と奸をすべて一方においてしまえば、首を下げて生きる屍になってしまう。いつものように食べたり飲んだりし、耐え難くなったときには二杯ほど酒を飲み、酔ったら頭を覆って大いに眠る。これが最も手っ取り早く、しかもほぼ上手に身を処して自分の地位を保てる。/そうなんだ。この隙間の中に入っていけば、確かに方法がない中の方法ということになるだろう。^(註8)

ここの作品でいう「三人」とは大学を出ている知識人である。この作品には、閉じこめられた都市の中で、漢奸にならないという意志を持った人間が果たして本当に漢奸にならないで生き抜くことができるか、或いは、このような状況で、どのような方法で日本軍に抵抗して行くことができるか、ということの追求がある。

ただ、この作品にはまだ、『四世同堂』に見え

るような、飢えに苦しむ庶民は出てこない^(註9)。また、日本軍に様々な形で圧迫される人々の詳細な描写がない。この部分の描写も都市に閉じこめられるという点では、避けて通れないものである。

では、老舎という作家は、なぜ早い時期からこのような占領された都市を場面設定しようとしたのか。このことに対する解答は実は、各作品の読み方全体とも深く関わってくると思われるが、ここで、取りあえずひとつの読みの見通しをも含めて、この場面設定について、いささか述べておきたい。

① まず、老舎自身の経験という点である。老舎は占領下の都市で生活した経験はないが、このことは老舎に起こり得たかもしれない環境であるということはいえる。すでに冒頭で紹介したように1937年に日本軍占領下の都市で生活することを避け山東省の済南から江蘇省の武漢に逃れてきた経験を持っている。また、さらに言えば、自分の故郷である北京は既に日本軍に占領されているという状況もあった。このことから、このような占領下の都市というのは、老舎にとって、最も身近で、感情移入しやすい場面設定であるということには違いないのである。

② また、この場面設定には、当然ながら、作者の着眼、意図というものが関わっているということもいえるだろう。つまり、この場面設定によって最も自分の言いたいことが表現できると考えているということである。だから、この場面設定にも、作家の「戦争」に対する見方というものが現れているということになる。

③ 例えば、この場面設定から、いわゆる「戦争」の「戦う」ということは、必ずしも、いわゆる「戦場」で武器を持って敵を攻撃するという面だけでなく、もっと身近なところ、もっと普通の、またもと弱い人々のところにも存在していることを示したいと

いうことも分かるのではないか。

④ さらに、城壁に囲まれた都市に閉じこめられるというこの設定によって、作品に、戦争のひとつの「極限状態」が出現することになるだろう。だから、作者はこの「極限状態」に着目していると考えることができる。

⑤ 例えば、「極限状態」は以下のような局面を生み出すことになる。この「極限状態」によって、日本軍の残虐行為がますます鮮やかになり、同時に、日本軍に抵抗する人々、日本軍に協力する人々がしだいにはっきりあぶり出されることになる。「極限状態」では、「漢奸」として日本軍に協力するか、「戦う人」になるのかの選択を迫られるのである。この時、どのようなタイプの人物が「漢奸」になるのか、逆に、どのようなタイプの人物が「戦う人」になるのかが鮮明になってくる。さらに、ここで注目すべきは、普通の人々がどういう理由で、どのように「戦う」人々になって行くのか、逆に、何故、どのように「漢奸」として日本軍に協力してゆくようになるのかという部分であろう。

以下で、改めて、さらに、この短編集『火車集』における「漢奸の描き方」、「戦う人々の描き方」、或いは「この短編集における独特な戦争の描き方」を取り上げて、それぞれについて具体的に述べて行きたい。

三. 漢奸の描き方

漢奸の描き方を見て行くことにする。

前述したように、漢奸は先に『且説屋里』で描き出され、『東西』はそれに次ぐものである。ここでは、まず、この二つの作品のストーリーを紹介し、その後、漢奸の特徴を分析して行く。先行する『且説屋里』は次のようになっている。この作品は、場面は主人公の家、物語は地の文での主人公の説明、心理描写、後には、主人公

と部下とのやりとりによって出来上がっている。

主人公は包善卿という人物であり、この人物が漢奸である。彼については作品の冒頭で以下のように紹介されている。

二十一世紀の中国人が享受でき、占有できるものを、包善卿はすでに享受し占有してきたし、現在も享受し、占有している。彼にはお金があり、洋風の家があり、車があり、息子娘がいて、骨董品があり、並べて置くことのできる書籍があり、名望があり、身分があり、一連の、名刺や訃報の知らせに印刷することができる肩書きがあり、様々な友達がいて、電灯、電話、ベル、扇風機があり、寿命があり、太った身体と各種の栄養剤を持っていた。^(註10)

この包善卿は、戦争以前にすでに官界で上手に泳ぎ回り、財を築き上げていることが示されている。この人物が日本軍統治の政府で、新しく建設委員会会長に就任するのである。しかも、この人物は日本側に自分を会長に任命してもらう条件として、自らの口から、日本人を高等顧問に任命することを約束していることも明らかになっている。自分が会長になるために事前に日本軍と取引をしたのである。

事件が起こる。包善卿の就任に対する反対運動が起こったことが包善卿に知らされる。包善卿が、そのような人物であること、しかもこの人物は日本軍に協力していることも社会の誰もが知っている。だから、この就任に学生が激しい反対運動を起こしたものと考えられる。

そして、この物語の落ちが、この学生たちの中に自分の愛する娘もいて、娘にも激怒する。こういった内容である。

なお、このような、父娘を作品の中心に置くこと、さらに父と娘の歩く道が異なるといった作品構成などは、後の『火葬』を連想させる^(註11)。

次に『東西』である。

この物語は、途中召使いが少し出てくるが、ほぼ二人の登場人物のみでできている。場面は、夕飯の後、二人が電報を待っているところから始まる。

一人の男は鹿書香といい、もう一人の男は郝鳳鳴という人物である。この二人は、主人である鹿書香の家で、日本人の犬陵という人物からもたらされる局長職決定の知らせを待っている。作品はこの際の二人の心理描写、やり取りで出来上がっている。

鹿書香は日本に留学したことがあり、たくさんの日本人の知り合いがいることが自らの口から述べられる。一方郝鳳鳴は英国に留学した男である。鹿書香と郝鳳鳴は、心の中ではお互いに軽蔑し合いながらも、実際には、持ちつ持たれつの関係を保っていることも分かる。いわば、二人の関係は、鹿書香が郝鳳鳴に甘い汁を吸わせ、郝鳳鳴の方は鹿書香を助ける形で仕事をしている、ということになる。

おもしろいことに、二人の話の内容から、中国のエリートに属する、東西の留学生だった人物たちが、日本軍の政府の下で、力を合わせ、日本軍の中国占領に協力し、中国の民衆を苦しめているという、皮肉な構造が浮かび上がってくるのである。

このような物語であることから、ふたつの作品に、漢奸描写の特徴があることは十分に考えられる。以下で、この特徴の幾つかに、考察を加えて行くことにする。

① 漢奸に罪悪感がない

老舎の描く漢奸の特徴の一つは、なんといいても、漢奸といわれる人物は自分が、自分のやっている漢奸行為を、心の底から、本当に、悪いことをやっているとは思っていない、ということにあると考えられる。

客観的に見れば、その人物は明らかに漢奸であるといえるにもかかわらず、人々がその人物を「漢奸」とか「売国奴」と非難しても、なぜ自分がそのような呼ばれ非難されるのか本当に

理解できないのである。確かに、一般的には、もし自分が他人から漢奸だと非難されることがあれば、自分が正義の側にいることを主張するために「自分は漢奸ではない」と述べることはある。だが、老舎の描く漢奸は、このようなレベルの自己弁護ではなく、真から、本当に、自分が悪いことをしていると考えず、むしろ自分の行っていることは正当で、かつ当然の行為と考えているのである。だから作品に登場する漢奸たちに後ろめたさは微塵もない。もし自分を非難する人がいれば、その人の非難は、単なる個人的な嫉妬、怨みから出ていると感じ、心の底から、本当に、且つ真剣にその人の非難の方に憤るのである。

『且説屋里』では以下の記述を挙げることができる。

「学生！学生よ！一群の馬鹿な子供たちよ！」彼は心の中で言った、「おまえたちに何が分かるというのか！何が分かるというのだ！包善卿の政治生活はむざむざとおまえたちの騒ぎにつぶされるに違いない。包善卿が人に申し訳がないような、どんなことをしたというのだ！馬鹿者ども、馬鹿者ども等が！」^(註12)

同じような傾向が、『東西』の中では、鹿書香の言葉に現れている。

私を嫉妬し恨んでいる人はもしかしたら私を売国奴と呼ぶかもしれない。その実私は自分の本当の能力を使って人民のために仕事をしているのだ。いわんや日本人のやり方は決してみんながいうほど悪くはない。あの人たちは確かに聡明な人たちだ。真面目に遠慮なく言わせてもらえば、私は日本人と合作したいのだ。売国奴だって！人の評価は棺の蓋が閉まって定まるものである。それぞれ良心に従えばいいのだよ！^(註13)

老舎の描く漢奸は非常に生き生きとしている

ように見える。繰り返しになるが、それは、漢奸は自分たちがやっていることは「悪い」ことだと思っていないし、そればかりか、むしろ自分たちには才能があり、正しい行為をしていると考え、誇らしげに生きていて、ということからもたらされると考えられる。

② 権力保持者に媚びる

次の漢奸の特徴は、彼らが、その時期の最も強い権力を持っているもの——ここでは日本軍である——に寄り添い、媚びへつらい、やがて寄生するということである。これも老舎の描く漢奸には特に強調されるもののひとつであると考えられる。

『且説屋里』の、例えば以下の描写はまさにそうである。

建設委員会の会長は十の内の六、七は王莘老に与えられるものだった。しかし包善卿は山木のところで少しばかり手を打った。王莘老がどうしても山木に承知しなかったことを、包善卿の方は自らの手で「あなたが私の会長を発表したら、私はあなたの高等顧問を発表します」を送ったのである。彼は山木に別れを告げるとき、両足を軽やかに小刻みに動かして後ろに退きながら、腰を少し曲げ、この「互惠」条件を提出したのだった。果たして、王莘老は委員のポストさえ手に入れることができなかった。かわいそうな莘老！莘老がどんなに融通が利かないやつであれ、ひっきりや旧い友人なのだから、彼のためにポストを見つけてやらねばなるまい。包善卿は仕事をするのに至るところで人に申し訳が立つようにするのである。彼は思わず笑みを漏らした。^(註14)

権力を持っている者が望んでいることを察知し、それを實現して見せ、権力者の歓心を買う。この能力こそが漢奸の必須の条件であるようだ。

このようなことは『東西』の次の描写にも見取ることができる。鹿書香はけっきょく局長の座を獲得することができなかつた。その経緯を、鹿書香が説明するのが以下の部分である。

「いいかい、鳳鳴、もし私がただ副局長だけを手に入れたのであるならば、それはいうまでもなく、正局長は必ず日本人のその方の人物であるということだ。私は不幸にも政府のこの方面を逃れることはできなかつた。しっかり覚えていなさい。あなたが足を降ろすとき、どこがしっかりしているかきちんと見なければならぬことを。」/「だったら正局長が頼っている人が犬陵よりもっとしっかりしているということですね！」……（略）……「そういうことだ。だから私はさっき言っただろう、私の日本の友人は犬陵だけに止まらないと。お前も知っているだろう。九・一八以来、日本人の勢力も決して集中してない。誰もがみな功を立て勝ちを争おうとしているのだ。強の中にも強の手がある。この動乱の局面の中で、あくまで一人に頼り切るということはできない。仕事をするのは、遊泳や船を操るのと同じだ。水の勢いに随わなければいけなし、時に応じて変動しなければならぬ。」^(註15)

また、イギリスに留学していた郝鳳鳴にも、どうかして日本人に近づきたいという気持ちがあることに注意したい。

このことを以下の文章で知ることができる。

彼は自分を恨んだ、どうして当初英国に行って勉強しようとして、日本に行かなかつたのか。日本留学生を馬鹿にしていたのは本当である。しかし、事実が事実である。現在日本留学生は相場が上がり、彼自身は値段が下がった。もし彼が日本語を喋ることができれば、もし彼に日本の友人がいたら、鹿書香に頼ることがあるものか。ふん、彼も資格があ

るのだ。いや、自分を恨んではいけない。結局英国留学生は英国留学生なのだ。もし鹿書香が英国に留学していたらこの地位にありつくことはできなかつたはずだ。^(註16)

この郝鳳鳴の態度、考え方も、漢奸の大きな特徴ということができる。

日本人がもっとも強い権力を握っているときには日本につき、英国人が権力を握っているときには英国につく。日本でなければならぬ、また鹿書香でなければならぬ必要はどこにもない。だから、このような人物は日本人が権力を失った途端、鹿書香がバックをなくした途端、日本人や鹿書香を最も残酷に扱い、激しく攻撃することが、十分予想できるのである。^(註17)

③ 金のため

では、なぜ漢奸になってしまうのか。金が欲しいのである。では、どうして金が欲しいことが、漢奸の道に繋がってゆくのか。

この点に関して『東西』の郝鳳鳴の場合を挙げておこう。

彼女の髪は、一回パーマをかけるのに費用がかかる。彼女の服、白粉、革靴、手提げ鞆……しかし彼女はとても綺麗だ。金を使う。当然金を使わねばならない。問題ではない。世の中に金のかからない奥さんはいないのだ。^(註18)

金が欲しい理由のひとつは、美人で、金のかかる奥さんを満足させるためである。

さらには、車も手に入れたい。

現在彼は生活のために生活しているということを知っている。彼、彼の奥さんは、どちらもとても多くのものを欠いている。これらのものがなければ、生活は貧しくて苦しく、耐え難く、少しも面白くないと感じる。例えば、夫婦がかなり何日もの間相談しているのに、

ずっと一台の車を買うことができない。この乗用車がないので、生活はとっても多くの制限を受けている。まるで何処へも敢えて行くのも嫌みだだった。一日の時間がむしろ人力車に半分は無駄にさせられている。この乗用車のため、その他の多くの必需品のため、生活を豊かにさせるもののため、彼は売国奴と叫ぶことはできなかった。彼は現在生命の意義を知り、生活の趣味を認識した。少年時の一切の理想はすべて空しいものだった。現在、また、ただ多く金を稼ぎ、生活を豊かにすることだけを知っていた。^(註19)

簡単にいえば、女性と贅沢のために金がいるということである。

老舎が描く漢奸には、しばしば美人で派手で金遣いの荒い奥さんがいる。そして夫婦で美味しいものを食べ、飲み、良い服を着るといった贅沢三昧の生活をする。自ら進んで漢奸行為を行う人物には、しばしばこの二つが付け加えられている。

だが、美人で派手で金遣いの荒い奥さんがいることも、贅沢三昧の生活をすることも、あるいは、平和で、政治が国民のために行われ、物も豊富にある時期においては、まだそれほど問題にならないかもしれない。個人の責任でやればよいのである。お金を稼ぐ能力のある人は、そのような奥さんを娶ればいいし、自由に贅沢三昧な暮らしをすればいいだけのことである。

ところが戦時下では違う。日本軍という敵に統治され、しかも物が不足し、また一方では金を稼ぐことが容易でない条件の下では、そうはいかない。平和な時代と同じレベルで考えることはできないのである。まして、敵に占領され、城壁のある、閉じこめられた都市での生活ということになれば、なおさら、そうである。

このように、敵に占領され、閉じこめられた中で、お金はどこからもたらされるのか。どうすれば手に入れることができるのか。ここが、敵の日本の統治者に関わってくる。お金を得るた

めには、どうしても、日本の統治者に協力するか、或いは同胞から巻き上げるしかないのである。

だから、特に戦時下では、金を得ることが、中国人としての「節」を守ることと大きく関わっている。もし「節」を守り、日本の統治者からお金をもらうことを潔しとしなければ、お金は入ってこない。逆にもし「節」を捨てれば、お金をもうけるチャンスがある。

「節」を守っている人にはお金は手に入らず、「美しく派手で金遣いの荒い奥さん」を娶り、その奥さんを満足させられない。まして贅沢三昧の生活などできるはずはないのである。

このことから、「美しく派手で金遣いの荒い奥さん」を娶り、贅沢三昧な暮らしをしている人物は漢奸である、ということになるのである。

④ 老舎の漢奸の捉え方

これまで述べたことから分かるように、そもそも、戦争時には、平時時には問題にならなかったことが問題になることがしばしばあるし、また、これまで戦争がない時期にはたいして問題にならなかったことが、戦争時にはとても大きな問題なることだってあると思われる。

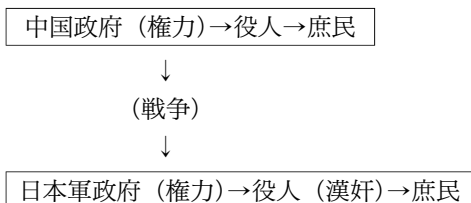
この漢奸の問題も、実は、中国社会がもともと抱えていた役人の問題で、それがそっくりそのまま日本軍占領下の都市に入り込んでいると考えることができるのではないか。

役人になることを、中国語で「昇官発財」という言葉で称えたりする。「昇官発財」は辞典に「① 官位が昇って金持ちになる。② 役人になって金をもうける。」^(註20)とある。この言葉は決して悪い意味で使われていたわけではない。つまり、人々も、もともと役人が「昇官発財」を求めていることを当たり前だと認めてもいたのである。

ところが戦争が起こって、漢奸となった役人が日本軍の手先になり同胞に向かって残酷な行為をするのである。こうなってしまうと、役人を許すわけには行かない。だが、これは急にこ

うなったのではない。もともと中国の役人に、このようになる傾向が内在していたのである。それが、戦争が起こって、日本軍が都市を占領し、その都市の政治の中枢に日本軍が座ることによって、今まで以上に、内在していたものがはつきり浮かび上がってきているだけのことである。

日本軍の占領で統治機構が以下のように変わった。



もともと「役人」というものは、上から来るものを下に伝えるだけ、下の者に上からの命令を実行させるだけで、自らの仕事を、中国民族のためとか、庶民の幸せためとか、中国の繁栄ためと考えていなかったのである。

このような役人たちであるから、自分たちの都市が、日本軍に占領され、上が日本軍政府になったとたん、すぐに日本軍の意向を汲んだ行動を取り始めるのである。日本軍政府が残酷なことをしようとしているから、役人も忠実に残酷なことをする。日本軍が中国人の弾圧の方針を出せば、中国人の役人も、中国人の同胞を平気で過酷に弾圧をする。役人たちが変わったのではなく、単に上が変わったから、役人も変わっただけのことである。

また、このような役人の態度であるから、彼らにとって必ずしも、中国政府でなければならぬ理由はどこにもない。日本でも、英国でも、どこでもよいのである。ともかく役人にしてくれる政府であれば、どこの政府でも歓迎するし、役人になるためには、どのような政府にだって媚びへつらうのである。

では、何故それほどまでに役人になりたいのであろうか。なぜなら役人は金になり、良い暮

らしができるからである。

これまでの役人は役人になることで自分のための金もうけに精を出した。これと同じように、日本軍統治下の役人も、役人になって、やはり権力機構の隙間を利用しお金を手に入れることに励む。ただ、前者を「役人」と言い、後者を「漢奸」と言っているだけなのである。

これが老舎の描く漢奸の正体である。

四. 戦う人々の描き方

漢奸の対極にいる人々が、日本軍と戦う人々である。但し、今回取り上げている作品の中心にいる、戦う人々は決して軍人ではなく、そこらあたりにいる普通の人々、庶民なのである。作品では、しばしば、これらの人々がしだいに戦う人々になって行く姿が描き出されている。

だが、この戦う人々を幾つかの作品で検討してみると、戦うとはいっても、最初から何の迷いもなく、戦う気持ちがあったわけでない。実は、戦うためには、越えなければいけない幾つかのハードルがあり、このハードルをひとつずつ越えて行く必要があるのである。

そして、このハードルを越え、他の人々にはつきり戦う意義を述べることでできる人たちが、作品の中の理想的な人物たちであり、すでに実際に戦うことのできる人々、或いはすでに戦っている人々なのである。

① なぜ戦うのか

戦うには、まず、なぜ戦うのか、或いはなぜ戦わねばならないか、という点をはっきりさせる必要がある。この点は、例えば、日本軍によって、自分の最愛の人が殺されたという場合においては、最も明白な理由となる。

この点が、『浴奴』という作品では、娼婦に化けた中国人女性が、日本人女性を連れて、入浴場に来ていた日本軍人を殺害する話しに描き出されている。その女性は日本軍人を殺した後以下のように言ってその場を去るのである。

肥った女性は自分に言い聞かせるかのように言った、「私の主人は、南口で死にました。私も今日彼らの内の一人を殺しました。」言い終わると、頭を上げ、日本人女性をじっと見た。振り向いて、階段を飛び降りていった。^(#21)

この女性にはおそらく戦うことにたいして、何の躊躇もないし、死の恐怖のようなものも感じられない。むしろ、驚くほど冷静沈着である。だが、普通の人、一般市民であれば、このようなわけにはいかない。この点については、後にもう一度触れることにする。

② 戦いへの関わり方

戦うときには、いろんな戦い方、或いは戦いへの関わり方があることを知っておくことも重要なポイントのようである。この点で最も重要なことは、自分ができることから始めるということが強調されているように思う。

『一塊猪肝』では自分なりの方法で実際の戦争にかかわっていこうとするインテリ女性が描かれている。彼女は大学を卒業しているけれど、傷兵病院で働いている。彼女は戦争へのかかわり方について以下のように述べる。

私にはいかなる立場や計画はありません。私はただ私個人の力を役立てることができることだけを求めています。一人の戦士を救えば一分の戦闘力を保存できます。父母は亡くしましたし、家産はなくなりましたし、立場、主張は放棄してしまいました。私はすぐにできること、しなければならぬことをしようと思っています。私はただ一つの理想を残しているだけです。それは人それぞれが力を出しさえすれば、国は絶対に亡びないということです。国は私の父母であり、みんなは私の兄弟姉妹です。一路軍でもいいし、七路軍でもいい。およそ国のために血を流す人はみな英雄です。おおよそ専ら軍隊の系列、

所属に注意し、軽重をはかる人はみんな愚かです。^(#22)

まず身近なところから、自分ができるところから戦いに参加するという態度である。戦いという状況の中では、むしろ高度な知識を持っていることより、この態度が重要であると指摘しているのである。これも作者の一貫した態度である。このような部分は、後の『火葬』の女主角の考え方、行動を連想させる^(#23)。

③ 死の恐怖の克服

戦えば、死んでしまうこともあり、血が流れることもある。戦いでは、このことが予想されるが故に、それに対する恐怖も起こる。もし強い恐怖が起これば、その人は戦意を失ってしまうこともある。

どのようにして、死の恐怖を克服するか。これは戦う場合にはとても大切であり、前述の「なぜ戦うか」と大いに関係してくる。もし「なぜ戦うのか」がはっきりしていれば、死の恐怖も起こらないのではないか。例えば前述した「最愛の人を殺された」という理由があれば、その人には、すでに死の恐怖はなくなっているようにみえる。

このような理由は、一般の人、普通の人にはない。では、それが無い場合にはどうしたらいいのか。

作品を見てみよう。

『人同此心』の登場人物の一人、王文義は、以下のように述べる。

「逃げるか？」王文義は低い声で尋ねた。その後、長く経ってやっと頭を横に振った。「いや、逃げるわけにはいかない。何処へ逃げるのだ。どうして逃げるのだ。ここの土地は我々の土地ではないのか。」「私もそんなふうに自分に尋ねてみたことがある。」呉聡の声が少し高くなった。「私は必ずしも逃げるわけではない。私はこんなふうに思う。私たちがここで

死ぬのは余りにも惜しいばかりか、何らいいことはない。」「そうだ。我々は高等教育を受けている。だから惜しい。三人の力は余りに小さい。だから無益だ。」王文義は、いきなり、彼は立ち上がり、演説家が激烈な話しを思いついたかのように声を大きくした。「しかし、亡国奴には等級はない。一人の大学生と一人の車夫には少しの区別もない。さらに逆から言えば、亡国土になりたくない者にも区別はない。命にはみな区別はない。血にも、高低はない。国のために犠牲になり、誰かの血が地面に流れることは、みな同様の価値がある。愛国か愛国でないかは、半分は知識に決定されるし、半分は情感に決定されるのだ。民族の生存のために決戦する時に、我々がもし情緒を押さえ込んでいたら、我々の知識は私利私欲を専らにする道具となってしまう。自分を保護していれば、このとき、恥はなくなってしまう。戦いの外に立てば、我々はその時民族の同情と共感を失ってしまう。犠牲になることは、絶対に単に英雄になるためではない。死は我々それぞれが尽くすべき義務であり、何ら特別な栄光ではない。いたずらに長く生きながらえたいと思う人は、死は最も容易だと言うし、犠牲になることを決心した人は、死の価値を知っている。私は逃げない。死の価値は成就の大きさに因るのでなく、死の意志と理由によって、軽重が定まる。」^(註24)

この長い引用文に、何のために死ぬのか、なぜ血を流すのかという理由を見て取ることができる。これが、死の恐怖を克服するために必要なのである。

ここでは「自分たちの土地」「愛国の情」「民族の存続」が主張され、このために、起こるであろう死や、流されるかもしれない血に充分価値があることが強調されている^(註25)。

④ 庶民との連帯

また、同じ作品『人同此心』に路上で人に纏

い物などをして商売する老婦が登場させ、この老婦に以下のような気持ちを表明させている。

彼女の血液の中に流れている、あの民族の生命力、心の中に深くしまわれている、あの民族の自由自立であろうとする、持って生まれた性質が、彼女をこのように憤怒させ、このように希望させるのかもしれない。この兵士を殺して何の意味があるのか。彼女は知らないし、また深く考えようもしない。彼女はただ彼がそこにいることが恥辱であり、恥辱は必ず洗い清めるべきであると感じただけだった。まさに若い娘が時期になれば恥ずかしさを知るようになるように、この老女は民族と国土——この名詞を使うことはできないけれど——のために恥ずかしいのである。おおよそこの兵士を殺すか、或いは殴ることのできるものを、彼女はこの人を英雄——或いはこれを使うことができるかもしれない——と呼ぶだろう。彼女の心の中の英雄は必ずしも紅いひげ、青い顔をした人物ではなく、街を行ったり来たりしているそれらの男性であり、ただその人がその兵士をやっつけさえすれば、である。^(註26)

『人同此心』という作品は王文義のようなインテリの青年と、路上で商売をしている庶民の気持ち、考え方がびったり合うというところで、王文義のようなインテリの青年の考え方、彼らの行為の正当性を明らかにすることになっている。

五. 独特な戦争の描き方をしている作品

ここで取り上げる作品は『一封家信』という短い作品である。

この作品はいささか分かりにくいところがある。だから、ややもすると、単に、「開けていて、才能があり、美しい」と思ったのだが、実は「軽薄で、誤魔化しがうまく、着飾っている」だけ

のつまらない女性と結婚した愚かな男性の物語ということにされてしまう可能性もある。

だが、決してそうではなく、やはり、この作品も、戦争の悲惨さ、残酷さを描き出すことを主眼にしており、それを描き出す方法、そして描き出したものが、非常に独特なので、少し分りにくくなっていると、と考えられるのである。

以下ストーリーの展開を追って、この『一封家信』を考えていこう。

この作品の主人公の男性、老範は「派手で、金遣いの荒い、誤魔化しの巧い」奥さんを嫁にもらう。

何故、このような奥さんを嫁にもらったのかが書かれている箇所を見てみよう。

老範は本当に自分の妻を愛していたし、自分の息子を愛していた。結婚前、絶対に彼は、開けている美女を娶うという志を立てた。この志のために、彼は真面目に仕事をし、質素儉約して生活した。あらゆる青年達が持つ小さなロマン行為を、すべて、無駄な枝や葉みたいにすっかり切り尽くし、単に一輪のロマンの大きな花だけを育てた。煙草さえも吸わず。/お金を残して、大胆になり、彼は特にロマンのために仕立てたスーツを着て探検した。彼は見て、追いかけて、彩珠嬢を娶った。/彩珠は彼女自身が思っているほどの美人ではなく、老範が思っているほどのそんな美人でもなかった。しかし、彼女は若く、澆刺とし、誤魔化しが巧かった。だから老範には彩珠は最も理想とする女性ではないけれど、それとほとんど同じだと感じさせた。彼女をその場所に置いても彼女は見劣りしたり、田舎風を出すことはなかった。ここにおいて、彼は貯蓄を全部はたいて、生まれてこのかた最大のロマンのツケを精算し、結婚した。^(#27)

だがこの女性は、先ほど触れたように、本当は「軽薄を、開けているとし、誤魔化しを、才

能とし、着飾るのを、美しいとする女性」^(#28)だったのである。「だが彼は決して後悔しない」^(#29)。むしろ、彼女を一生懸命に喜ばせるために、彼は必死で仕事をし、お金を稼ぎ、そのお金をすべて彼女に差し出すのである。このことを、彼は、納得して行っているのである。

この作品を理解する上で、まず、以下のことを知っておく必要がある。

果たして老範の、このような考え方、行為を、簡単に愚かなことと一笑に伏すことができるだろうか。よくよく考えてみると、人は、余りに真面目で、実直であるが、逆に正反対の、「開けていて、才能があり、美しい」女性を嫁にもらいたいというような願望を持つこともあるかもしれないのである。ところがその女性は「派手で、金遣いの荒い、誤魔化しの巧い」だったのである。これを簡単に愚かさで片づけてしまっただけでは、なぜかしらこのようになってしまう、本来人間がもっている弱点の存在を無視することになるのではないだろうか。このようなものをも認める視点を失っては、この作品の本来の創作意図を見失ってしまう。

はっきりしているのは、老範は、最初から最後まで、何も、どこも悪くないし、特別に愚かでもないのである。

この作品ではこの男性の性格を以下のように記述している。

彩珠に対する態度から、彼の処世、人柄の料簡と方法を見いだすことができる。彼は非常に忠誠で、消極的には彼は功を求めず、過ちなきを求め、積極的には彼は事ごとに良心とその二百元の報酬に申し訳が立つことを求める——彼はいつも三百元の力を出し、決して損をしたとは思わない。こんなふうだから、彼はみんなに前途のない人だと見られ、かりに彼がたくさん仕事をするを求めたとしても、彼は騙し易い能なしとしか認められず、絶対に感謝することはない。^(#30)

非常に真面目で、実直で、責任感も強い。仕事はできるが、やり手ではなく、人から悪く見られることはない。主人公の老範はこのような人物なのである。

だが、この妻が「派手で、金遣いの荒い、誤魔化しの巧い」女性であるという事実は動かない。確かに、老範は悪くはないのだけれど、この「派手で、金遣いの荒い、誤魔化しの巧い」妻を娶ったということは、客観的に見れば、明らかに老範の負担になるだろうことは予想できる。

すでに「漢奸の描写」の項でも述べたように、平和な時代であれば、このことも生死に関わるほどの問題にならないだろう。平和な時代であれば、たとえ、このような奥さんであろうと、それでも老範が奥さんを愛しており、真面目で、お金を稼ぐ能力があれば、お金を稼げる程度で、奥さんを満足させればいいだけのことである。

ところが、なんと戦争が起ってしまった。

そのうえ、自分の住んでいるところが占領されるという状況が出現してしまったのである。奥さんが「そのよう」であるから、平和な時代でも、いくらか負担だったことは確かであるが、戦争下では、「そのような」奥さんの負担が平時よりさらに何倍も重くなって行くことになる。

楽になる方法はある。漢奸になってしまうことである。

老舎の作品では、「このような」女性を娶る男性は、必ず漢奸の道を選択することになる。まさに先に取り上げた『東西』という作品がそのひとつの例となるだろう。「このような女性」を満足させるためにはお金がいる。お金がいるから、漢奸の道を歩くことになるという公式がある。

ところが、この『一封家信』はこの公式からはずれている。『東西』の主人公とは違って、この物語の主人公、老範は漢奸になることを断固として拒否するのである。

北京と天津が悪夢のように陥落した。老範は北京に住んでいる。彼は必ず出て行かねばならない。良心が、彼が如何なる不正道のお金を受け取することを許さなかった。しかし、彼は出ていくことができなかった。彼にお金がなく、必ず二等でなければ行くことを承知しない奥さんがいたからである。^(註31)

漢奸になることを拒否した途端、老範にかかる負担がもっと大きなものになったことに気がつかねばならない。

老範は、「派手で、金遣いの荒い、誤魔化しの巧い」奥さんを満足させねばならないということと、漢奸にならないという、いわば二つの相反する無理難題を同時に背負い込んでしまったのである。

ともかく、占領された北京にいたでは、この難題の解決は不可能である。漢奸にもならないで、このような奥さんを満足させることは、どう考えても、不可能なのである。だから、老範は北京を出て行くしかない。だが、このような奥さんは、「このようである」が故に、お金のない貧しい暮らしに耐えうることはできない。一緒に連れて行くことは不可能だった。これなども、漢奸になることを拒否したことで、「このような」女性が老範にもたらす、目に見える、以前より大きくなった負担である。老範はついに単身で妻と子どもを残し、北京を出て行く。こうして、やむを得ず、妻や子供と離ればなれになったのである。

老範は武昌で仕事をする。

彼は六七月中に三度仕事を変えた。彼が給料の面で移ろうと思ったのではなく、それぞれのところが彼を引っ張ったのである。彼は責任を持って仕事をするのが分かったからである。戦争中、人々は確かに良心をなくしたのだけれども、同時に真面目に仕事に取り組む人も知った。たとえ自分は一生懸命に仕事をするのを承知しないにもかかわらず、

である。この種の状況の下で、老範の価値はみんなに見いだされ始め、腕利きとなった。^(#32)

老範は漢奸にならず、お金も稼ぐことができた。

ところが新たな問題が生じた。稼いだお金をすべて妻に送り続ける。しかし妻の方は手紙一つもよこさないのである。

このことを考えるために、ここで作品の背後にある事情ももう少し読み取ってみる必要がある。

まず武昌で働き、お金を稼ぐという負担も、恐らく北京でお金を稼いでいたときよりも、ずっと大きくになっているはずである。

さらに、「このような」奥さんを妻としている負担に加えて、「離れて生活している」ということからもたらさせる「心配」「不安」という心の負担が、老範に重くのしかかっていることに気がつく必要がある。「あのような」奥さんであり、且つ「離れて生活している」が故になおさら「心配」「不安」が増しているのである。単に奥さんからもたらされる「負担」の部分だけでも、「離れて生活している」ことで、北京で一緒に暮らしていたときのものに比べると、著しく大きくなっている。

ここに手紙の重要性がある。もし、きちんと手紙が来れば、「心配」「不安」が解消できたのである。だが、いくら待ってこない。このことで「心配」「不安」はますます膨らんで行くのである。

手紙がやっと来た。しかし、その手紙は、「心配」「不安」を解消するどころか、逆に、さらに「心配」「不安」を大きくするものであった。

以下が返事の内容の関わる部分である。

手紙が来た。彼は何にも顧みることができず、震えながら一度、二度、三度と読んだ。三度読んだけど、それでも彼女が言っていることが何であるか分からなかったが、それら

の文字の間に彼女の姿を見、当時の恋愛期間の喜び、息子の小珠の可愛い声と顔を思い出した。小珠はどうしたのだろう。彼は手紙の中に探した。一字一字細かく探した。なかった。小珠の1文字も出てない。失望が彼の心を冷たくした。大部分の文字が読んで分かった、みんな彼を責めるものだった。彼女の姿とすべてがみんな消えてしまった。彼の目の前には死んだ文字と、冷酷無情な文字があるだけだった。^(#33)

この後、この手紙の内容にショックを受け、著しく精神に異常をきたし、よろよると日本軍の飛行機の前に出て行き、その飛行機の爆撃で死んでしまう。余りに無惨な老範の死である。

もう一度、ここで確認しておきたいことがある。

それは、この女性の性格、態度は戦争前、一緒に生活していた頃と何ら変化していないのではないということである。

だから、手紙がなかなか来ないことも、来た手紙の内容にしても、妻の性格、態度からすれば、当然予想されることではないのか。

にもかかわらず、以前は耐えられたものがものが、この時点で、老範が、なぜこれほどまでに大きなショックを受けたかということなのである。

それは、つまり、すでに老範が、自分にのしかかってくる重みが倍増され、それに耐えきれなかったということなのである。だから、精神に異常をきたしたのである。

いわば、この物語は、これでもかこれでもかと、老範に重い荷物を背負わせ、その重みをしだいに増して、老範を虐めているイメージでとらえるべきであると考え。或いはまた、この作品は、非常に真面目な人物が、余りにも真面目であるが故に、しだいに悲劇の淵に追い込まれてしまい、最後にはその淵に落ち込んでしまうという物語として捉えるべきであろう、と考える。

もともと、奥さんという重荷を背負っていた。しかし、これは自ら納得していたことであり、むしろ、自分から進んで耐えていたと考えてもいい。確かに奥さんの性格、態度には問題がある。しかし、この点に関しては非難されることはないのである。だから、この物語の本質は、性格、態度に問題のある奥さんをもたらすからだという老舎の自業自得を、ことさら問題にするところにはない。

そうではなく、性格、態度に問題のある奥さんという重みを背負った老舎の、その重荷をこれでもか、これでもかと重くするものをこそ問題にしているのである。その重くしたものが、実際に老舎を死に追いつめた張本人なのであり、そして、この張本人こそが、間違いなく、日本軍が仕掛けている戦争なのである。

このように考えると、この作品が、戦争のもたらす残酷さ、悲惨さを描き出したものであるということがよく分かるのではないかと思う。

いささか繰り返しになるが、納得して背負った重荷には、耐えるのは当たり前である。しかし、戦争が与える重荷は、本人が納得して背負ったものではない。だが、困ったことに、この二つの重荷は、決して別々のものではなく、連動している。戦争からの重みにも耐えなければ、奥さんの重みを支えることができないのである。これらの重荷を、この真面目な老舎は一生懸命に背負おうとした。でもとうとう耐えきれず、精神に異常をきたしたのである。この作品に描かれている残酷さ、悲惨さはここにある。

おわりに

今回は『火車集』の作品の内、戦争描写のあるものに絞って取り上げてみた。そして、本論文で、老舎の戦争描写の萌芽の部分を確認し、その表現の仕方の特徴を検討した。このところではいづらか老舎の特徴を言うことができたのではないか。

戦争を描いた作品で、そもそも庶民を戦争に

動員するために書いたのか、それとも人間の永遠のテーマをめぐり出すために書いたのかを判断することは難しいところもある。しかしながら、老舎の作品は、少なくとも、今回取り上げたものは、戦争下に表れる人間の本質に関わる、重要な、一つの局面をきちんと描き出しているような気がする。

ただ、老舎の作品とは少し離れるが、逆に、戦争下で必要なものが、必ずしも、平和な時代にもすべて必要なものとは限らない。戦争下で、余りにも重要だ、必要だと、それを強調してしまうと、却って平和の妨げになることもあるのではないか、ということも知っておかなければならないことのように思う。

なお、今回考察しなかった作品もある。『“火”車』『兔』『我這一輩子』である。これらも魅力的な作品であり、これらについても、後の機会に、是非論じてみたい。(完)

【注】

本論文のテキストは『老舎全集第7巻』（人民文学出版社・1999年）を使用した。したがって、ここで表記するページは、このテキストのものである。なお、この短篇集は『老舎文集第9巻』（人民文学出版社・1986年）、或いは『老舎小説全集11』（人民文学出版社・1993年）にも入っている。翻訳方面では、『火車集』の『我這一輩子』だけは『老舎小説全集7 火葬 私の一生』（平松圭子 日下恒夫・学研・1982年）にある。

- (1) 『老舎小説全集 四世同堂(下)』『老舎年譜』日下恒夫編・学習研究社より。
- (2) このほかにも、「7・7」以前の作品には、例えば『我這一輩子』には、自国の兵隊に対する批判的な表現がある。もちろんこれは作品の時代背景も違うし、兵隊といっても、歴史的に見ても、もともと問題のあった軍閥の兵隊というものに対する風刺的表現であるが、このような兵隊をも含めて、後の作品から自国の兵隊に対する風刺的な書き方も消えているようにみえる。ただ、この点については、さらなる調査が必要である。
- (3) 『四世同堂』は『惶惑』『倫生』『飢荒』の三部からなっている。この作品は短期間にできあがったものでなく、日中戦争終結後もずっと書き続けられた。この状況をここに少し紹介してお

- く。この三部うち『惶惑』は1944年に書き始められ、1945年始めに完成した。発表は、雑誌『掃蕩報』でおこなわれ、1944年11月10日から1945年9月2日まで連載された。『倫生』は1945年、『惶惑』完成の後に、書き始められた。この『倫生』は1945年11月に単行本として良友復興図書印刷公司から出版されている。『飢荒』は遅くとも1949年までには原稿ができあがっていたと考えられている。発表は雑誌『小説』に1950年5月1日から1951年1月1日まで連載された。しかし、この『惶惑』は未発表原稿があり、その未発表部分は1982年雑誌『十月』第二期に掲載された。
- (4) ◎拙論「老舎『火葬』試論」(八戸工業大学紀要第22巻) ◎拙論「老舎『四世同堂』試論」(八戸工業大学紀要第23巻)。この論文がまさにそうである。参照して欲しい。
- (5) 同(4)
- (6) 同(4)
- (7) 同(4)。ただ拙論「老舎『四世同堂』試論」で、理想的人物については、特に取り上げて書いてはいない。
- (8) 『老舎全集第7巻』p.585
- (9) (4)の論文で特に取り上げてはいないが、作品の中心になる「四世同堂」の一家が飢えに苦しむ様子は実に克明に描かれている。このことは『四世同堂』の第三部が『飢荒』であることから推察できるだろう。
- (10) 『老舎全集第7巻』p.399
- (11) この点については、拙論「老舎『火葬』試論」(八戸工業大学紀要第22巻)で述べている。『火葬』の原点がこの作品にあるかのようである。
- (12) 『老舎全集第7巻』p.413
- (13) 『老舎全集第7巻』p.503
- (14) 『老舎全集第7巻』p.402
- (15) 『老舎全集第7巻』p.502
- (16) 『老舎全集第7巻』p.504
- (17) 漢奸は『四世同堂』『火葬』どちらにも登場する。漢奸については、拙論「老舎『火葬』試論」(八戸工業大学紀要第22巻)、拙論「老舎『四世同堂』試論」(八戸工業大学紀要第23巻)で特に詳細に論じている。
- (18) 『老舎全集第7巻』p.499
- (19) 『老舎全集第7巻』pp.503-504
- (20) 『中日大辞典』(愛知大学中日大辞典編纂処・大修館書店)
- (21) 『老舎全集第7巻』p.573
- (22) 『老舎全集第7巻』p.582
- (23) 同(11)
- (24) 『老舎全集第7巻』pp.586-587
- (25) 同(4)
- (26) 『老舎全集第7巻』p.590
- (27) 『老舎全集第7巻』p.596
- (28) 『老舎全集第7巻』p.597
- (29) 同上
- (30) 同上
- (31) 『老舎全集第7巻』p.598
- (32) 『老舎全集第7巻』p.601
- (33) 同上